

「エイズ合併結核患者の全体像とは」

沖縄県福祉保健部
健康増進課結核感染症班班長

糸数 公

世界結核デー記念セミナーは、第14回国際結核セミナーが閉会したのち夜の部として同じくヤクルトホールにおいて17時45分より19時30分まで「結核のない世界へ～気づこう、築こうTB・HIVパートナーシップ～」をテーマにパネルディスカッションの形式で行われた。

最初のあいさつでは、結核予防会仲村英一理事長からキーワードとして「多面性」という言葉が提示された。次に元結核研究所リサーチフェローの河津里沙コーディネーターからは多面性を認識するために、スクリーンに大きな球体が示され、イメージトレーニングを受けているような心持ちのなか、パネラーたちの発表が始まった。

最初に国内のエイズ治療の拠点である国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センターの島田恵看護支援調整官から、エイズ患者数の推移は右肩上がりで、エイズ合併結核患者も最近5年間で、結核入院患者2,368名中22名(0.9%)がHIV陽性であることが報告された。結核と同時にHIVが判明した例も12例あるが、一般的にエイズの治療(HAART療法)がされていない場合は結核治療を先に行い、その後のHAARTを始めると結核が再燃することに注意が必要であることを教えられた。ACCではエイズ合併結核患者の治療を支援するために病院と保健所が連携して、服薬管理を行っている例もあるということであった。

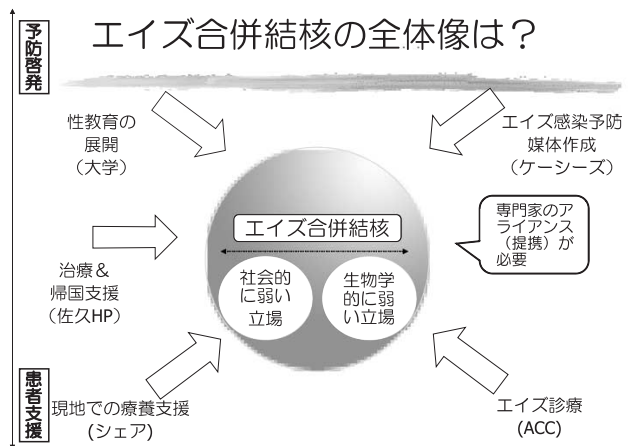
次に地域医療の立場から、長野県佐久総合病院総合診療科の高山義浩先生がHIVと結核予防活動について報告した。地域の特徴として、HIV陽性者のうちエイズを発症して発見される割合が高く外国人患者も多いため、約半数に帰国支援を行ってきた。しかし、多くは現地で亡くなっていることがわかったため、病院として帰国後の支援組織づくりに取り組み、NGOや大使館と連携して現地医療機関でも治療が継続できるようなしくみを作り上げている。また、佐久地域においてもタイ人に対するの健診を実施して予防啓発活動に努めていることも紹介された。

高山先生の報告にも紹介されたNGOシェアの立場として、昼の国際結核セミナーでも発表した沢田貴志先生(港町診療所)が、逆説的な表現で対策を示した。すなわち、患者の状態が悪くなる

のは、病院に行くのが遅れるか薬を途中で止めることだから、差別や貧困という問題を克服して、DOTSやHAART療法によりしっかり治療を継続することが重要である。そのために現地のNGOと連携して家庭の主婦に対して慢性疾患のケアに関する教育等を行っている。

続いては、北海道でHIV/エイズの啓発媒体を開発してきた(株)ケーシーズの佐藤真康社長が登壇し、ラジオCMやCGによるわかりやすい媒体を紹介し、東京医療保健大学看護学科講師の渡會睦子先生は、学校教育の場で実践してきた系統的な性教育の内容と効果について発表した。

このように様々な立場から報告があった後、フロアも含めて討論が行われた。エイズ合併結核の患者たちは、生物学的には感染に弱い立場にあり、社会経済的にも困難があることが確認され、それを地域全体で支えていく必要性が確認された。地域を知っている保健師には、そのコーディネート役が期待されている。



セミナー全体を球体をイメージしながら聞いて、それぞれの活動がどういう関係なのかを図に描いてみた。

球体の本質は患者が社会的にも生物学的にも弱い立場で、さらに予防啓発と療養支援という軸に沿って位置づけてみた。今後はそれぞれの活動を統合するような連携が必要であろう。「エイズと結核の専門家のアライアンス(提携)が必要」と提案した佐藤社長の言葉がそのことを表している。